

西郷古酒蔵群第3次発掘調査の概要

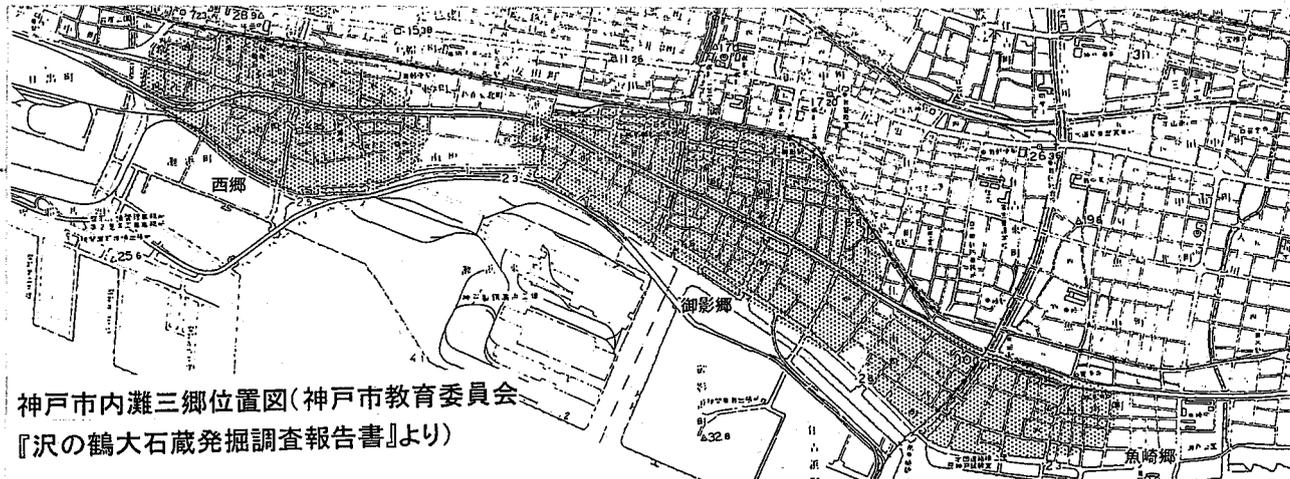
平成 16 年 9 月 21 日

神戸市教育委員会文化財課

神戸市教育委員会は灘区新在家南町3丁目の月桂冠灘支店の跡地で、平成 16 年 8 月 26 日から発掘調査を実施しております。今日現在まだ調査は続いていますが、これまでに明らかになった調査の成果を地元の皆様にお知らせいたします。

平成 8 年に大石南町の沢の鶴資料館を発掘調査したことをきっかけとし、市内での継続的な酒蔵の発掘調査が始まりました。酒蔵の調査は今回で 8 回目、西郷では沢の鶴資料館、ヤマト運輸集配所に続いて 3 回目の調査になります。

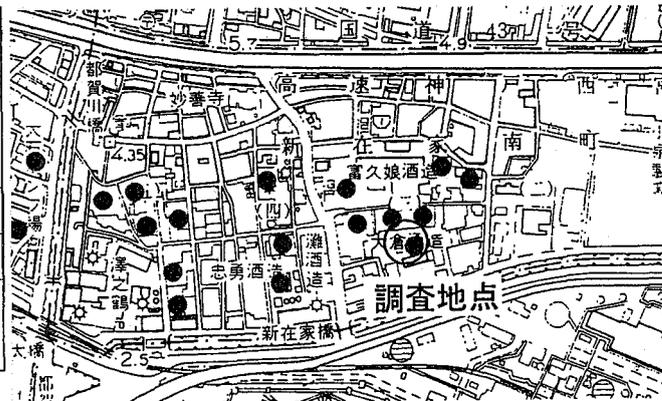
いわゆる灘五郷は江戸時代と明治時代以降では組合せが少し異なります。新在家のある西郷は江戸時代から灘五郷のひとつでしたが、当時は新在家周辺の村々を含めたもう少し広い範囲が西郷と考えられていたようです。しかし現在では新在家・大石・味泥以外での酒蔵の実態は不明です。灘では江戸時代前期の元禄頃には酒造が行われ始めていたようですが、まだその規模も小さく、ほとんどが地元で消費されていたようです。灘での酒造が飛躍的に発展した契機は宝暦 4 (1754) 年の「勝手造り」令と言われています。これ以降、伊丹・池田・鴻池等のそれまでの銘醸地の生産量を大きく追い抜き、現在まで日本一の酒造地帯として発展しております。寛政 5 (1793) 年には新在家の蔵元として、米屋庄兵衛・花木屋長兵衛・花木屋新七・上坂屋五右衛門・若林屋与左衛門等々の名前が確認でき、22,239 石の米で醸造していることが判っています。しかしその時の酒蔵がどの場所にあったのか、具体的には全く判っていないのが実情です。



神戸市内灘三郷位置図(神戸市教育委員会『沢の鶴大石蔵発掘調査報告書』より)

近世		近代	
灘三郷	旧郡名	所属村名	現行行政区画
上	東組	打出・芦屋・深江・青木・魚崎・住吉	魚崎
	中組	御影・石屋・東明・八幡	御影
灘	西組	新在家・大石・碧屋・徳田・河原・五毛	西郷
下	灘	八部	二ツ茶屋・神戸・走水・脇浜
今津	武庫	今津	今津
		西宮	西宮

灘五郷の地域区分(神戸市新修神戸市史 歴史編Ⅲより)

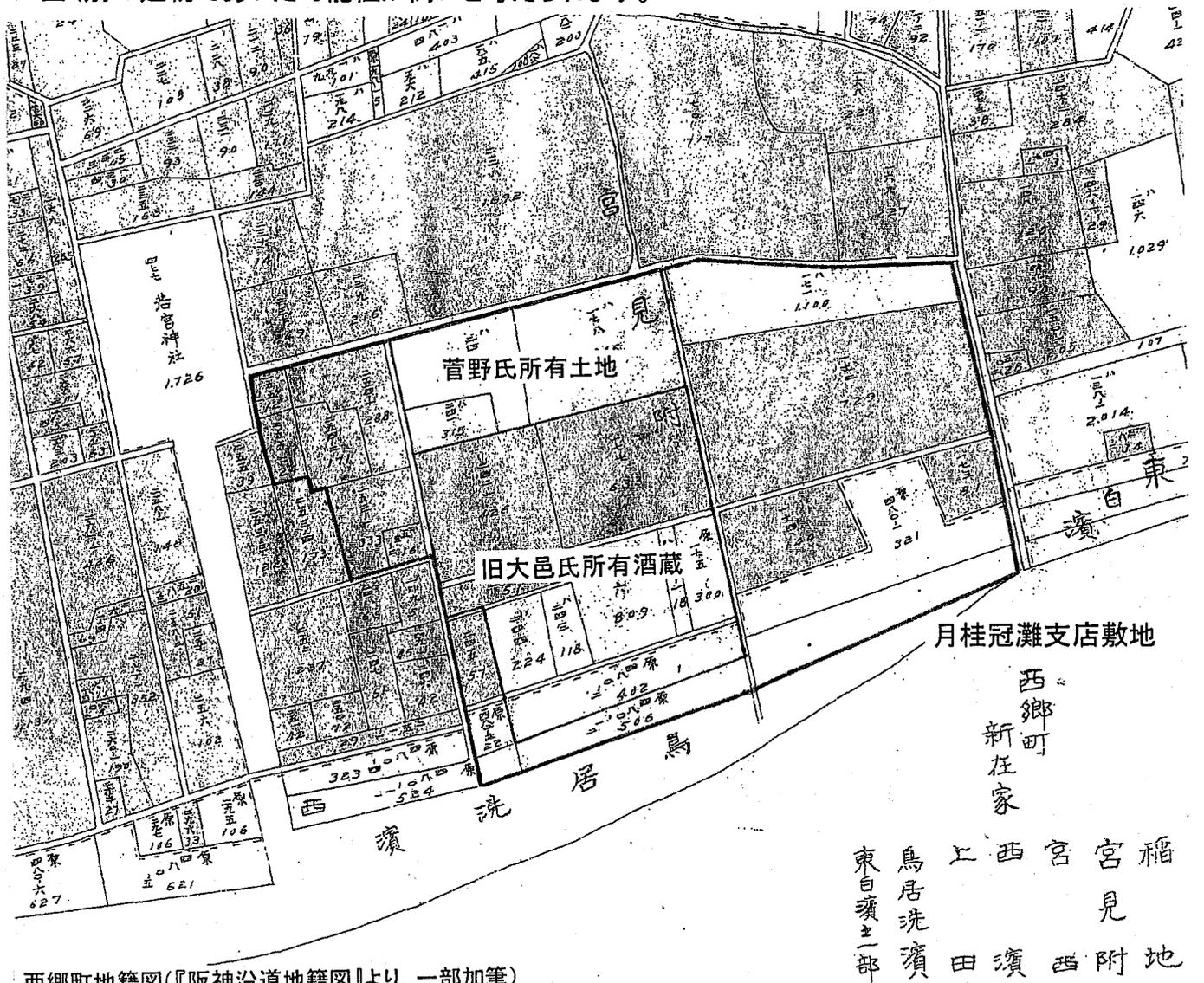


調査地点位置図(神戸市教育委員会『沢の鶴大石蔵発掘調査報告書』より)

明治32年、京都伏見の月桂冠は当時の伏見酒の停滞を打破すべく灘に進出してきました。当初は味泥の若井氏の酒蔵を借りて醸造しましたが、明治42年に新在家で大邑氏の酒蔵と土地を購入して自前の酒蔵を持つようになり、さらに新たに酒蔵を新築しました。また明治44年には大邑氏の酒蔵の北側の土地を別の蔵元の菅野氏から購入しました。その後味泥の酒蔵でも醸造していましたが、月桂冠の灘での中心は新在家になりました。その後何度か敷地が拡張され、現在のような広大な敷地となっていました。

平成7年の阪神淡路大震災で現存していた市内の古い酒蔵の大半が倒壊してしまいましたが、月桂冠灘支店でも同様に、甲蔵・乙蔵・西蔵の3つの木造の酒蔵が倒壊してしまいました。今回敷地に店舗が新築されるに先立って試掘調査を実施したところ、甲蔵・乙蔵・西蔵と倒壊を免れていた旧大邑氏所有酒蔵の他、敷地の東側でも早くに解体されて地上に痕跡を残していなかった酒蔵の存在を確認しました。従ってこれらの酒蔵の存在する範囲で、店舗の基礎が掘削される範囲について調査を実施しました。

調査の結果、以下の酒蔵と酒造遺構を確認しました。なお東蔵は西蔵に対して付けた仮の名称で、現在では当時の酒蔵の名称は判っていません。また通常北側に「大蔵」、南側に「前蔵」という南北2棟の建物が酒蔵の基本的な建物の形態ですが、東蔵では前蔵に相当する建物を2棟確認しました。これらの2棟が全く別の建物であるのか、変則的な平面形をした1棟の建物であるのかは明らかにはできませんでした。しかし石垣の積み方を見ると、少なくとも建てられた時は全く別の建物であった可能性が高いと考えられます。



西郷町地籍図(『阪神沿道地籍図』より、一部加筆)

西蔵大蔵: 東側石垣、土間、男柱掘形おとこばしらほりかたと掘形ほりかたの片側に積まれた仮設の石垣 江戸時代

甲蔵大蔵: 東側石垣 明治時代、江戸時代には畠

乙蔵大蔵: 西側石垣 明治時代、江戸時代には畠

乙蔵前蔵: 西側石垣 明治時代、江戸時代には畠

東蔵大蔵: 北側石垣、土間 江戸時代、明治時代に石垣前に雨水溝、大正14年以降に改修

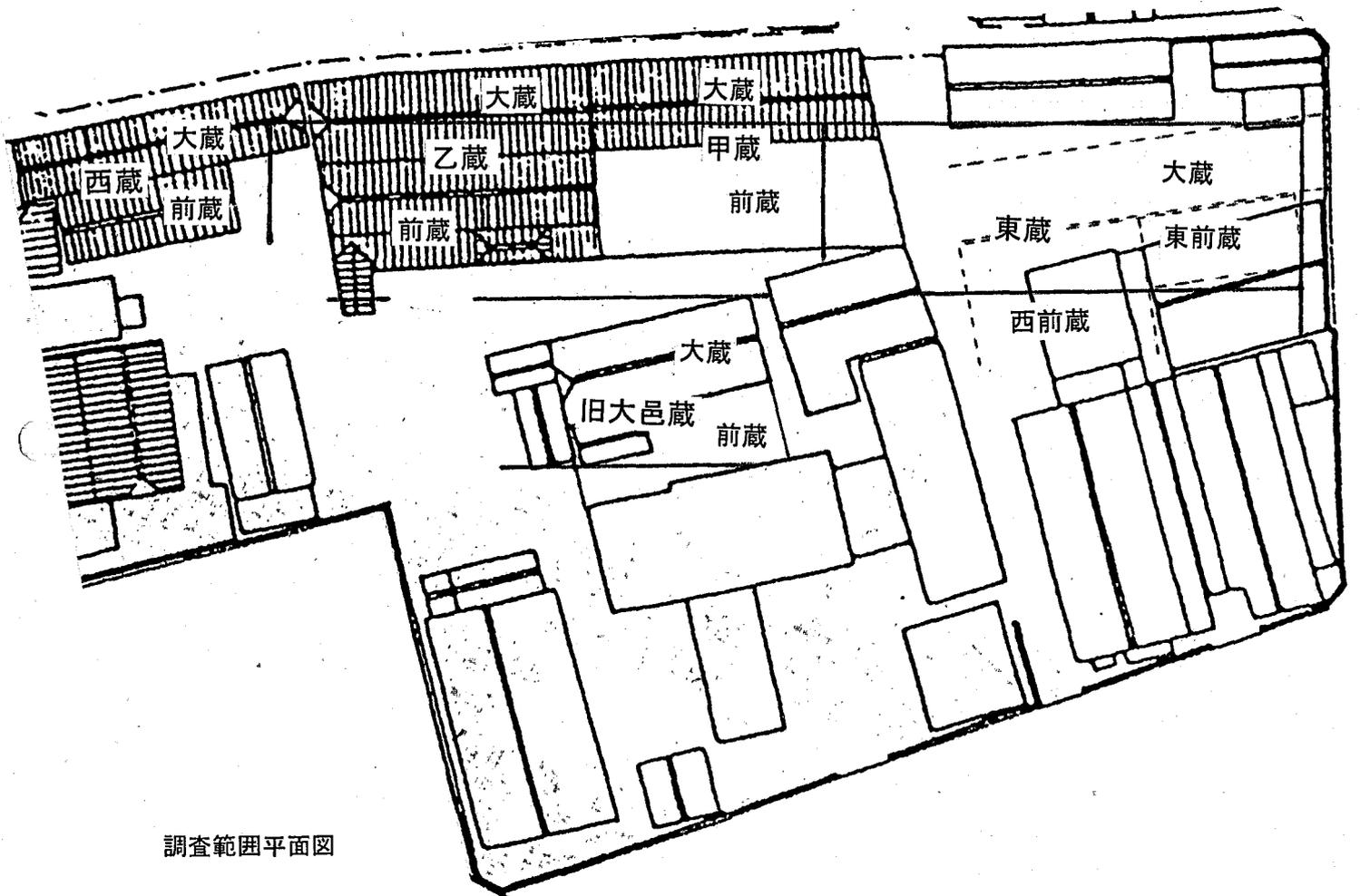
東蔵東前蔵: 東側石垣、南側石垣、土間 江戸時代、石垣を積み直し?

東蔵西前蔵: 東側石垣、西側石垣、土間、礎石(2ヶ所)、男柱掘形おとこばしらほりかたと掘形ほりかたの片側に積まれた
仮設の石垣(2ヶ所) 江戸時代

旧大邑氏所有蔵大蔵: 北側石垣 江戸時代、石垣を積み直しもしくは増築

旧大邑氏所有蔵前蔵: 西側石垣、焼土の堆積 江戸時代

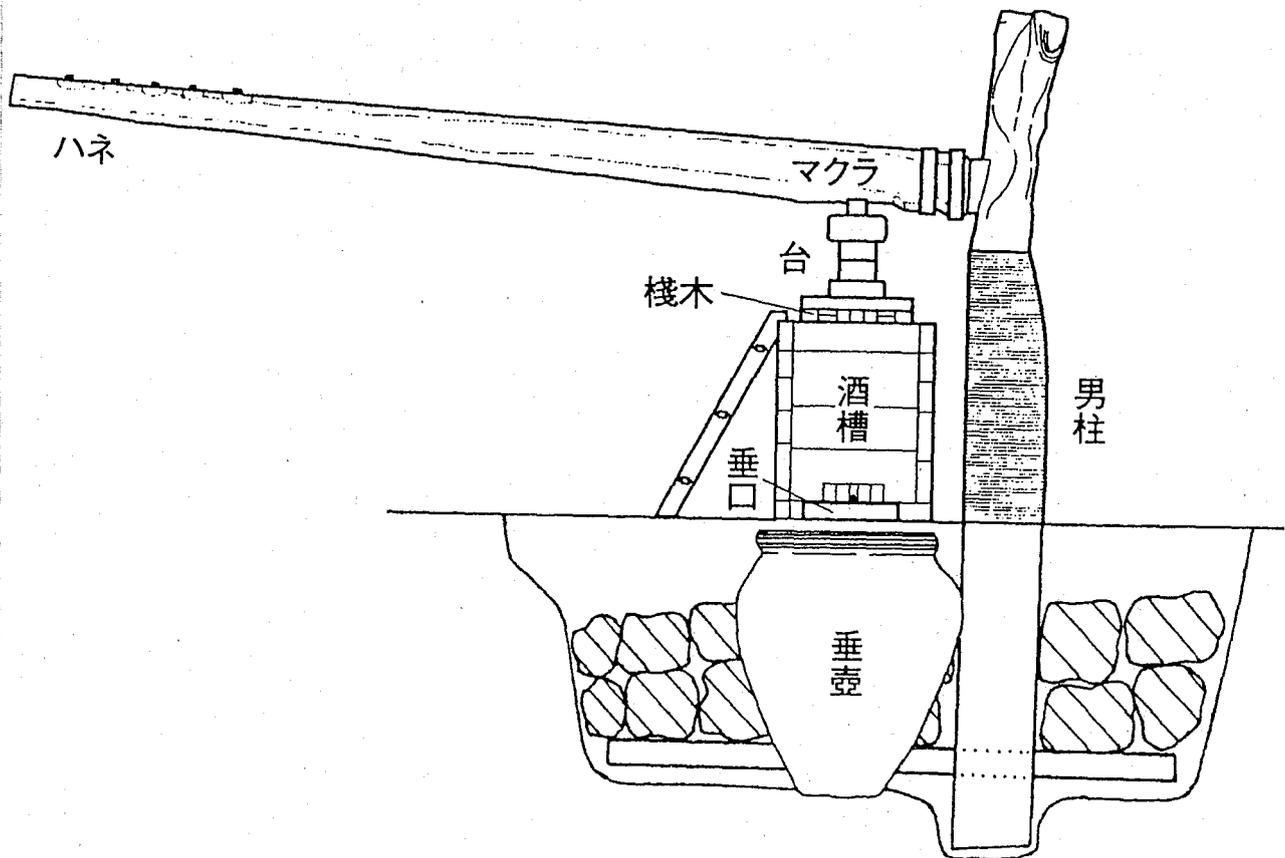
付属建物: 米蔵・桶納屋・燃料置場等々?



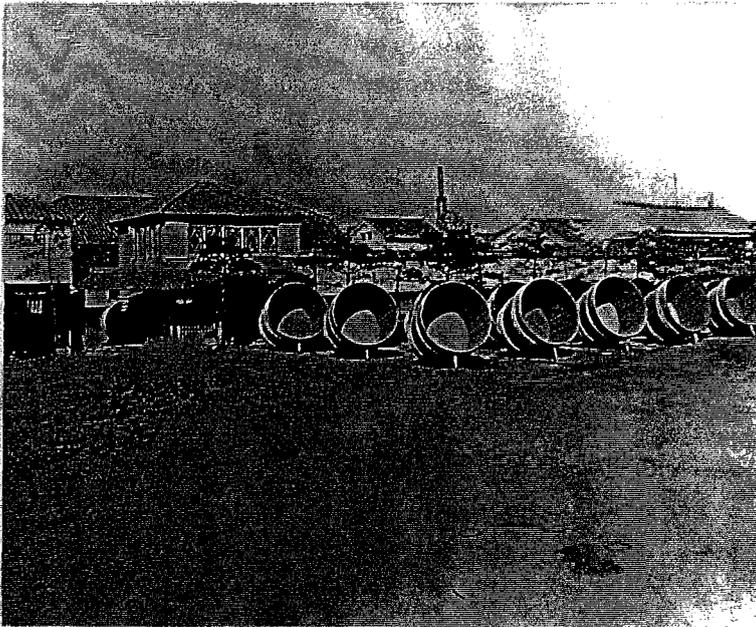
調査範囲平面図

男柱とはできた酒を搾る槽場にある施設で、ジャッキや器械で搾ようになる以前は全て男柱で搾っていました。太い柱を酒槽の横に立て、男柱の先に長いはね棒を差し込み、はね棒の先に石の重りをたくさんぶら下げて槌子の原理で搾ります。そのため男柱にはものすごい力が掛かってしまいます。したがって男柱自体が浮き上がってしまわないように地面を深く掘り下げ、男柱の底に横木を噛まし、さらにその上に多量の石を置いています。しかし灘は地盤が砂地のため、深く掘り下げると周囲が崩れてきてしまいます。そこで掘り下げ中の安全を図るため、仮設の石垣を積んで作業し、作業終了後はその石垣も一緒に埋め立てています。一時の石垣なので、石材の大きさも不揃いで、石垣を積む範囲も高さも特に決まりはないようです。

今回見付かった槽場は酒蔵の床面と同じ高さに酒槽を置くものであったようです。これまでの灘での酒蔵の発掘調査では、地面を掘り窪めて周囲に石垣を積んだ半地下式の槽場が見つかっています。灘が日本一の酒造地帯となり、醸造規模が大きくなって一度に搾る酒の量が増えると、高い位置にあるはね棒に重りの石を掛ける作業も大変危険が伴うため、作業効率上も安全管理上も半地下式の槽場の方がより望ましいと考えられますが、丹波杜氏の流儀であった灘でも各酒蔵内では色々な酒搾りの方式があったことが考えられます。



男柱遺構復元図(伊丹市『旧岡田家住宅保存修理工事報告書』より)



旧大邑氏所有酒蔵と考えられる写真です。秋の仕込み直前の頃でしょうか、南側の浜で大量の桶を干しています。



同じく旧大邑氏所有酒蔵です。正面奥の建物が今回一部が確認された前蔵と考えられます。右隅は乙蔵前蔵が写っているのかもしれませんが。



正確にはわかりませんが、東蔵の南側正面入り口でしょうか。奥に前蔵と考えられる建物が写っていますが、東西どちらかは判りません。

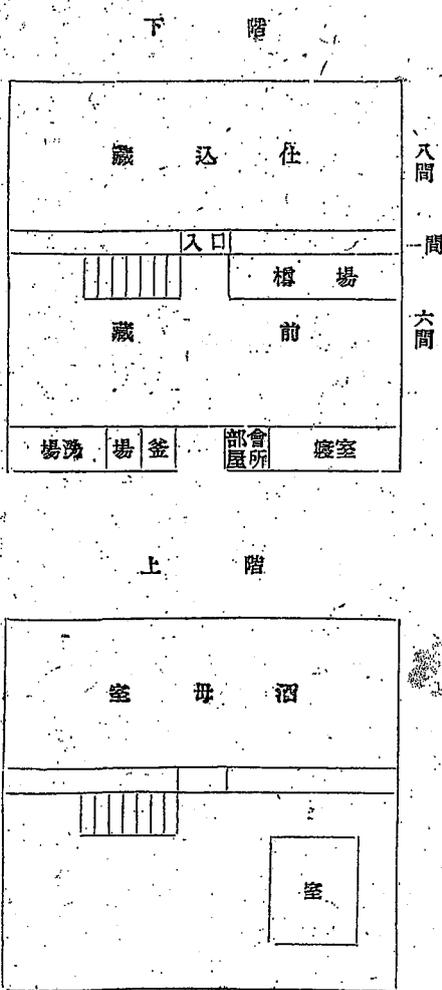
神戸市教育委員会文化財課では灘の古い酒蔵の調査をこれからも実施していく予定です。その際には皆様のご理解とご協力をお願いいたします。また古い酒蔵の写真や図面等の資料をお持ちでしたら、お教えいただけましたら幸いです。

三、酒造蔵の構造

附 容器器具機械

醸造蔵として古きは二百有餘年を経たるものあり、今津西宮方面は比較的古建築多く、灘三郷(魚崎、御影、西郷)の三郷を稱して云ふに於ては新築稍々多し、一般に新らしき酒造蔵としては、壹個半仕舞千餘石造りを基本とせり。

普通は仕込蔵、六間に十七八間又は八間に十三四間を有し、前蔵は仕込蔵と並列し、六間の奥行を有するを見る、仕込蔵には總二階又は中二階ありて、酒母仕込に利用し、前蔵に洗ひ場、釜場、槽場、室、を設備す、近來新築の理想とすもの、概略圖は左の如し。



麹室には半陸室、陸室、二階室の三種ありて大体に於ては陸室を多數とす、新築蔵に於ては二階室とすもの多し。

酒造蔵の構造(『灘五郷酒造一斑』より)